

よみがえる文化財

美術品修復の現場から

□■12



吉備国際大学教授
大原 秀之氏

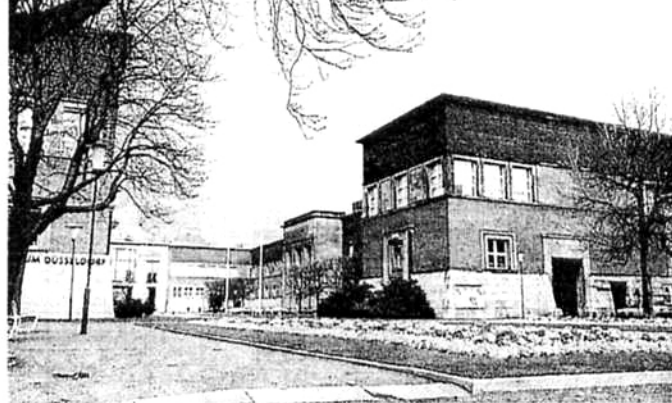
父50歳、母43歳の時、私は生まれました。しかし、医死状態での世に轉りました。そのためでしょうか、

小学校3年まではいわゆる虚弱児童で学校へはほとんど行かず、週に3日は母に連れられて東京医科歯科大学付属病院に通っておりました。病院の先生方の献身的な治療の結果、小学校4年からはやっとも小学生に成る事ができました。

その後、美術に興味を持ちはじめた私は、子供の時に会ったお医者さんの勇敢な姿が忘れられず、とうとう「絵のお医者さん」を自指すようになったわけですが、しかし、当時の日本では「絵の修復」は認知度も非常に低く、ましてや修復を学ぶことなど全く不可能でした。

その後、美術に興味を持ちはじめた私は、子供の時に会ったお医者さんの勇敢な姿が忘れられず、とうとう「絵のお医者さん」を自指すようになったわけですが、しかし、当時の日本では「絵の修復」は認知度も非常に低く、ましてや修復を学ぶことなど全く不可能でした。

厳しい絵医者への道



デュッセルドルフ市立美術館と修復センター



硫酸をかけられたルーベンスの「アルブレヒト大公」



修復中のルーベンスの作品

心に没頭していますが、当時のヨーロッパには修復を志す日本人は皆無でした。そんな中、ドイツでは私が初めて東洋人の志願者とならう。どうも東洋人の腕を試してやろうとそんな気持ちで私を採用したらしいです。

◆ルーベンス作品に硫酸
それからは非常に短気で、素早い処置で、退院はしめは何かかられたのかわかりませんでした。だが、さすがに分析専門の科学者に、濃硫酸であることが判明。直ぐ胸の建物にある私のための修復室に、この不承不承を負った患者ルーベンスは運ばれて来ます。この作品の地盤下に炭酸カルシウムが使用されていたことで、素早い処置のおかげで大やけどを負ったルーベンスはその後無事退院しました。しかし、修復には年もの感月を要しました。

◆ドイツへ武者修行
そのため昭和50(1975)年、無職にも車庫75年(当時西ドイツ)に武者修行に旅立ちました。ヨーロッパでは美術館の修復に非常に力を入れておりまして、ドイツ以外にもフランス、イギリス、イタリア、オランダ、ベルギー、更に東ヨーロッパではポーランド、フランスなどには修復の機会が多々あります。今でこそ多くの日本人が修復を勉強しようとイタリアを中心に

◆「芸術 日」には津山郷土博物館、棟方志功(とむらたしこう)にも日本板面画の創設に参加し、わが国の現代色木板画の第一人者として活躍した水礼孝(みづれいこう)二津山市出身の作品展が始まりました。◆水礼は戦争で津山に疎開。そのまま郷里で創作活動をしたため無名で終わりましたが、展示ではマチスのようにシンプルで大胆な色彩表現といわれる作品が紹介されます。必見です。【福山祐二】



きび 談話

「芸術 日」には津山郷土博物館、棟方志功(とむらたしこう)にも日本板面画の創設に参加し、わが国の現代色木板画の第一人者として活躍した水礼孝(みづれいこう)二津山市出身の作品展が始まりました。◆水礼は戦争で津山に疎開。そのまま郷里で創作活動をしたため無名で終わりましたが、展示ではマチスのようにシンプルで大胆な色彩表現といわれる作品が紹介されます。必見です。【福山祐二】